道にグループでバケツと雑巾を手に持ち、「CAR WASH」の看板を揺らせながら、行き交う車を誘っている。一回三ドル程度で、普通の洗車より割安にしているところがミソ。

ゴルフ場のボール拾いはカナダならではか。ゴルファーが球をなくしそうな池や林で球を探し出しては、「三個で一ドルだけど、いらない？」と声をかけてくる。OB常習プレヤーには、悪くない買い物となる。

アルバイトで思い出したが、カナダでは夏になると、「ガレージ・セール」なるものが出現する。引っ越しなどで家財道具を処分する際、いらなくなった物を家のガレージに並べて売りさばくもの。庭の芝生の上で店開きすれば、「ローン・セール」とも呼ばれる。街角に「ガレージ・セール」の看板を立て、本、カーペット、衣服、家具、自転車、食器……と並べ、客（通行人）が来るのを待つ。値決めは客との交渉次第で、何が何でも売るというより、「欲しいものがあったらどうぞ」という、いたってのんきな、いわば〝素人ノミの市〟。財政に余裕のない新婚夫婦などは、まめに「ガレージ・セール」を見て回れば、掘り出し物に出会うこともある。

さて、夏の代表スポーツ、ゴルフに触れないと片手落ちになる。国土の広いカナダのこと、ゴルフ場もプライベートからパブリックまで数多ければ、ゴルフ・ファン層も中学生から老人まで幅広い。なによりも手軽なのがよい。本格派には物足りないが、パブリック・コースならば、たいがい車で三十分の圏内にある。料金はほぼ十ドル前後だから、ざっと日本の十分の一。学生やシニア（六十五歳以上）なら半額に割引きされる。加えて、早朝や夕方はこれまた割引き料金ときているから、利用者本位の娯楽施設とみた方が適当だろう。

早朝組はシニアの常連が多い。気の合った仲間、あるいは夫婦で朝の散歩代わりにプレーを楽しんでいる。もちろん、日本のようにキャディーはいないから、自分でバッグを乗せたプル・カートを引きながらの、のんびりプレー。スコアよりも会話と緑を楽しむことに目的があるかのようだ。

子供たちも主婦もマイペースのプレーで、こうした風景を見ていると、ゴルフ場というよりは公園にいる錯覚を覚える。この気楽さは、ゴルフが特別なスポーツではなく、カナダの夏の生活の一コマにすぎないことの証左だろう。

夏の朝は芝刈り機のうなり声で目を覚ます。冬の間雪をかぶっていた分、芝生の成長が早く、緑も鮮やかだ。一週間も放っておくと庭は草ぼうぼうとなる。芝生の敵、タンポポ退治と芝刈りは冬の雪かきと同様、亭主族の週末の仕事になる。芝を刈ったあとの甘い香りがただよう中、スプリンクラーの水滴で色濃くなった青芝の上をリスが跳び回れば、カナダの夏の絵は完成する。長い夏の夜は、家族団らんにもってこいだ。

忘れられぬ北極の一夏

岩下 莞爾

北米の最北端、北極海諸島最大の島、エルズミア島を初めて訪れたのは一九七四年である。それ以来、何度この島にでかけただろうか。

あるとき、極寒のなかで用を足していると、何か気配がする。ハッとして見構えると、なんと十数羽の北極兎である。兎に取り囲まれているのである。前足を上げ、耳をピンと立て物珍らしく気にこちらを見ている。中には手が届くほどに近づいてくるやつもいる。人間を信じ切った態度である。というより怖い人間を知らないのであろう。

翌年、私はあの人を信じ切ったような目をした兎が忘れられなくなって、夏のエルズミアを訪れた。北緯八十二度のレイク・ハーゼンにである。

レイク・ハーゼンは地球上の謎といわれる不凍湖である。川が凍り、海が凍結しているというのに、この湖だけは凍らない。それに、ここは動物のサンクチュアリでもあると教えられていた。

そこは、まさに人を信じ切った動物の宝庫であった。群れなす兎が、まのあたりまで近づき、やや用心深げではあるが、子連れの十数頭のマスクオックスやジャコウウシの一団が近づいて来る。一面緑という訳にはいかないが、赤茶けた大地に、赤、白、黄の名も知らぬ小さな花が咲いていた。

突然、鋭い嘴で鳥に襲われた、名は知らないが頭が黒く、腹は白、羽は紫がかり、尾の先が二つに分かれた、鴨よりはやや小さな鳥だった。数羽が空を舞い、一羽づつ急降下して来て私の頭を突っつく。かなり痛い。何か獲物と間違えているのだろう。

昨今の話を聞くと、このレイク・ハーゼンにも夏の間、ツアーが入って来るという。それはそれでいいことだと思うが、飛行機がひんぱんに離着し、コッテージでは四六時中、大きな発電機が唸りを立てている。兎も遠のき、マスクオックスも遙か小高い山の上から下りてこようとしないという。

（日本テレビ チーフ・プロデューサー）